「彼には積極性が欠けている」と「彼は積極性に欠けている」
―「満ち欠け代換」の成立原理―

Kare-niwa sekkyokusei-ga kaketeiru and *kare-wa sekkyokusei-ni kaketeiru*: The mechanism of 'michikake alternation' in Japanese

川　野　靖　子*

KAWANO, Yasuko

次の(1)が示すように、「欠ける」という動詞は、～ニ～ガ形と～ガ～ニ形の二種類の格体制をとり、しかも両文がよく似た意味になるという現象を起こす。(2)～(4)のように、「乏しい」「満ちる」「あふれる」も同じ現象を起こす[注1]。

(1) a. 彼に積極性が欠けているコト
　［彼には積極性が欠けている］（～ニ～ガ形）
　b. 彼が積極性に欠けているコト
　［彼は積極性に欠けている］　（～ガ～ニ形）
(2) a. 日本に天然資源が乏しいコト
　［日本には天然資源が乏しい］（～ニ～ガ形）
　b. 日本が天然資源に乏しいコト
　［日本は天然資源に乏しい］　（～ガ～ニ形）
(3) a. 選手達に自信が満ちているコト
　［選手達には自信が満ちている］
　（～ニ～ガ形）
　b. 選手達が自信に満ちているコト
　［選手達は自信に満ちている］（～ガ～ニ形）
(4) a. 彼に才能があふれているコト
　［彼には才能があふれている］（～ニ～ガ形）
　b. 彼が才能にあふれているコト
　［彼は才能にあふれている］　（～ガ～ニ形）

以下では、上記のような、～ニ～ガ形と～ガ～ニ形の交替現象を、（この現象を起こす「欠ける」と「満ちる」にちなみ）「満ち欠け代換」と呼ぶことにする。

「欠ける」等のように、格体制の交替を起こす述語がある一方で、このような交替を起こさない述語もある。たとえば次の(5)が示すように、「ない」は～ニ～ガ形には現れるが、～ガ～ニ形をとることはできない。

(5) a. 彼に積極性がないコト
　［彼には積極性がない］　（～ニ～ガ形）
　b.*彼が積極性にないコト
　［*彼は積極性にない］　（～ガ～ニ形）

また、「優れる」は、～ガ～ニ形には現れるが、～ニ～ガ形をとることはできない。

(6) a. この素材が耐水性に優れているコト
　［この素材は耐水性に優れている］
　（～ガ～ニ形）
　b.*この素材に耐水性が優れているコト
　［*この素材には耐水性が優れている］
　（～ニ～ガ形）

このように、交替を起こすのは一部の述語に限られているわけであるが、それでは、交替を起こす「欠ける」等の述語と、交替を起こさない「な

*かわの・やすこ
埼玉大学大学院人文社会科学研究科准教授、日本語学

い」「優れる」等の述語とでは、何が異なるのだろうか。「欠ける」等の述語が上記のような交替を起こすことは、既に多くの研究で指摘されているが（宮島 1972、西尾 1972、まつもと 1979、安 1996、林 1999、川野 2002 等）、交替を起こす述語と交替を起こさない述語の違いを分析し、どのような仕組みで「満ち欠け代換」が起こるのかを明らかにした研究は、管見の限りみられない。そこで本稿では、この問題について考察を行う。

以下では、まず 2 節において、「満ち欠け代換」の～ニ～ガ形と～ガ～ニ形が、それぞれどのような意味類型の文であるのかを確認し、続く 3 節で、交替を起こす述語（以下、交替述語）と交替を起こさない述語（以下、非交替述語）の違いを明らかにするための方法を検討する。その後、4 節と 5 節において、3 節で提示した方法により、交替述語の条件を記述し、「欠ける」等の述語において「満ち欠け代換」が起こる仕組みを明らかにする。

２．～ニ～ガ形と～ガ～ニ形の関係

「満ち欠け代換」の～ニ～ガ形（e.g., 彼には積極性が欠けている）と～ガ～ニ形（e.g., 彼は積極性に欠けている）は、一見、同じ意味を表すようにみえるが、格体制が異なることから、実際には意味類型が異なると考えるのが妥当だろう。具体的には、川野(2002)でも述べたように、～ニ～ガ形は存在・非存在や位置変化を表す文であり、一方、～ガ～ニ形は状態や状態変化を表す文であると考えられる[注2]。

まず、～ニ～ガ形について説明したい。以下に～ニ～ガ形の例文を挙げる。

(7) 日本に天然資源が乏しいコト
　［日本には天然資源が乏しい］
(8) 彼に積極性が欠けているコト
　［彼には積極性が欠けている］
(9) 選手達に自信が満ちているコト
　［選手達には自信が満ちている］
(10) 彼に才能があふれているコト
　［彼には才能があふれている］

～ニ～ガという格体制の文には、「机の上に本がある/ない」のような、存在・非存在を表す文や、「服に汚れが付く」「床にごみが落ちる」のような、位置変化を表す文があるが、上記(7)～(10)も、これらと同じく、存在・非存在や位置変化を表す文であると考えられる。具体的には、静態述語[注3]の「乏しい」「欠ける」を述語とする(7)と(8)は、ニ格句の事物（e.g., 日本）におけるガ格句の事物（e.g., 天然資源）の存在・非存在を表す。また、(9)と(10)では、動態述語の「満ちる」と「あふれる」が、ニ格句の事物（e.g., 選手達）にガ格句の事物（e.g., 自信）が存在するようになるという変化（位置変化）を表し、テイル形をとることで、変化後の事態、すなわち、ニ格句の事物にガ格句の事物が存在するということが表されている。このように、～ニ～ガ形は、存在・非存在や位置変化という類型的意味を表すと考えられる。

次に、～ガ～ニ形についてみる。

(11) 日本が天然資源に乏しいコト
　［日本は天然資源に乏しい］
(12) 彼が積極性に欠けているコト
　［彼は積極性に欠けている］
(13) 選手達が自信に満ちているコト
　［選手達は自信に満ちている］
(14) 彼が才能にあふれているコト
　［彼は才能にあふれている］

～ニ～ガ形と異なり、～ガ～ニ形は、ガ格句の事物の存在・非存在や位置変化を表してはいない（たとえば(11)は、ガ格句の事物「日本」がどこかに存在するということを表す文ではない）。～ガ～ニ形が表すのは、ガ格句の事物の状態[注4]や状態変化であると考えられる。まず、静態述語の「乏

しい」と「欠ける」を述語とする(11)と(12)は、ガ格句「日本」や「彼」の状態を叙述している。また、(13)と(14)では、動態述語の「満ちる」と「あふれる」が、テイル形をとることで、ガ格句「選手達」や「彼」の状態変化後の事態を表している（なお、「乏しい」等の交替述語が～ガ～ニ形で表す「状態」や「状態変化」の具体的な内容については、4 節と 5 節で検討する）。

３．交替を起こす述語の条件を明らかにする方法

「乏しい」「欠ける」「満ちる」「あふれる」のように「満ち欠け代換」を起こす述語が存在する一方で、1 節でも述べたように、このような交替を起こさない述語もある。本節では、こうした交替述語と非交替述語の違いを明らかにし、交替を起こす述語の条件を導くための方法について検討する。

2 節でみたように、「満ち欠け代換」の～ニ～ガ形は、存在･非存在や位置変化を表し、～ガ～ニ形は、状態や状態変化を表す。このことから、「存在･非存在と状態の両方を表す述語（あるいは、位置変化と状態変化の両方を表す述語）が交替を起こす」という一般化が、ひとまず考えられるかもしれない。

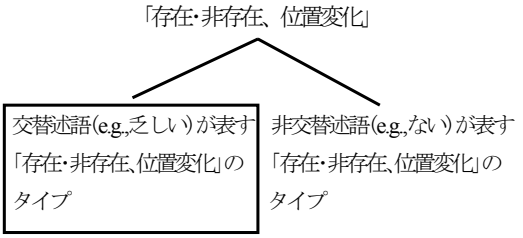
しかし、このような記述では、交替を起こす述語の条件を述べたことにはならないと考えられる。なぜなら、ある述語がどのような類型的意味（存在･非存在、状態、位置変化、状態変化等）を表すかは、その述語がどのような格体制をとるかを見ることではじめて分かることだからである。たとえば、「乏しい」が「存在･非存在」と「状態」の両方を表すことは、「乏しい」が～ニ～ガ形にも～ガ～ニ形にも現れるという事実から（すなわち、交替を起こすという事実から）分かることである。つまり、「存在･非存在と状態の両方を表す述語が交替を起こす」のような記述は、事実上、「交替を起こす述語が交替を起こす」と言っているのと同じであり、交替を起こす述語の条件を記述していることにはならないのである。

それでは、どうすれば交替述語の条件を導くことができるのだろうか。川野(2009)では、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」のような、「壁塗り代換」と呼ばれる交替現象について考察し、壁塗り代換を起こす述語の条件を導くためには、「位置変化」の下位タイプや、「状態変化」の下位タイプを考える必要があると論じた。川野(2009)のこの指摘は、本稿で取り上げている「満ち欠け代換」にも当てはまると考えられる。以下でこのことを説明したい。1 節でみたように、「乏しい」は～ニ～ガ形にも～ガ～ニ形にも現れるが、「ない」は～ニ～ガ形にしか現れない。

(15) a. 彼に積極性が乏しいコト
　　［彼には積極性が乏しい］　（～ニ～ガ形）
　b. 彼が積極性に乏しいコト
　　［彼は積極性に乏しい］　（～ガ～ニ形）
(16) a. 彼に積極性がないコト
　　［彼には積極性がない］　（～ニ～ガ形）
　b.*彼が積極性にないコト
　　［*彼は積極性にない］　（～ガ～ニ形）

このように、同じ～ニ～ガ形をとる述語（存在･非存在や位置変化を表す述語）の中も、「乏しい」のように交替を起こす述語もあれば、「ない」のように交替を起こさない述語もある。このことは、「存在･非存在」や「位置変化」という類型的意味に、さらに下位タイプがあり、交替述語が表す存在･非存在や位置変化のタイプというものが存在する（逆に言えば、そうしたタイプに該当しない存在･非存在や位置変化を表す述語は交替を起こさない）ということを示している。交替を起こす述語の条件を明らかにするためには、そうしたタイプを特定する必要があるのである。

(17)「存在･非存在、位置変化」の下位タイプ



同じことが、「状態」や「状態変化」にも当てはまる。次の例が示すように、同じ～ガ～ニ形をとる述語（状態や状態変化を表す述語）の中にも、「乏しい」のように交替を起こす述語もあれば、「優れる」のように交替を起こさない述語もある。

(18) a. この素材が耐水性に乏しいコト
［この素材は耐水性に乏しい］
（～ガ～ニ形）

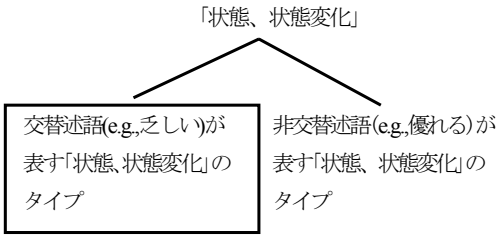
b. この素材に耐水性が乏しいコト
［この素材には耐水性が乏しい］
（～ニ～ガ形）

(19) a. この素材が耐水性に優れているコト
［この素材は耐水性に優れている］
（～ガ～ニ形）

b. *この素材に耐水性が優れているコト
［*この素材には耐水性が優れている］
（～ニ～ガ形）

このことは、「状態」や「状態変化」という類型的意味にも下位タイプがあること、そして、交替述語の条件を明らかにするには、交替述語が表す「状態」や「状態変化」のタイプを特定する必要があることを示している。

(20)「状態、状態変化」の下位タイプ



以上のように、本稿では、「存在･非存在、位置変化」や「状態、状態変化」にそれぞれ下位タイプを考え、交替述語が表す「存在･非存在、位置変化」のタイプや「状態、状態変化」のタイプを特定することが、交替述語の条件を導くための適切なアプローチであると考える。

4．交替述語「乏しい」「欠ける」の分析

本節では、3 節で提示した考え方に基づき、交替述語が表す「存在･非存在、位置変化」や、交替述語が表す「状態、状態変化」のタイプをそれぞれ明らかにする。

なお、後述のように、交替述語の「乏しい」「欠ける」「満ちる」「あふれる」のうち、「満ちる」と「あふれる」は、「満ち欠け代換」だけでなく、別の種類の交替である「壁塗り代換」も起こすことが知られている（宮島 1972、安 1996、川野 2002 等）。そこで、これらの述語については次の 5 節で取り上げることとし、本節では、「満ち欠け代換」のみを起こす「乏しい」と「欠ける」について分析を行う（これらの述語は静態述語なので、交替述語が表す「存在･非存在」と「状態」のタイプを考察することになる）。

4. 1.「乏しい」「欠ける」が表す「存在･非存在」のタイプ

この 4.1.では、「乏しい」や「欠ける」の表す「存在･非存在」が、どのようなタイプの「存在･非存在」であるのかを、非交替述語が表す「存在･

非存在」との比較から明らかにしたい。

以下に、これらの述語が～ニ～ガ形で用いられている例（すなわち、存在・非存在を表す述語として用いられている例）を挙げる。なお、参考として、括弧内に、交替形である～ガ～ニ形の例を示す[注5]。

(21) 日本には戦争遂行のための資源が乏しい。そこで、軍用機や戦車、銃、弾丸などの材料として使う目的で、会社などの事業体や家庭に鉄、銅製品の供出を募ったのだ。

（『帝国ホテル厨房物語』）

（交替形：日本は戦争遂行のための資源に乏しい）

(22) 木戸に人間的情愛が乏しかったのではない。その表現が拙劣であったのだろう。

（『「翔ぶが如く」と西郷隆盛』）

（交替形：木戸が人間的情愛に乏しかったのではない）

(23) 林先生はこれを、社会民主党が議会制の担い手として成熟していなかったことの典型的な例とされ、ミュラーにも政治家としての本当の指導力が欠けていたとされている。

（『ドイツ史10講』）

（交替形：ミュラーも政治家としての本当の指導力に欠けていた）

(24) 知らない夜道でふたり連れ。なのに彼女の歩きぶりには慎重さが欠けている。

（『パメラパムラの不思議な一座』）

（交替形：彼女の歩きぶりは慎重さに欠けている）

「（～ニ～ガ）乏しい」と「（～ニ～ガ）欠ける」には、次の(25)のような共通した特徴があると考えられる。

(25)「（～ニ～ガ）乏しい/欠ける」の特徴

「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量でガ格句の事物が存在する」という内容の存在を表す（なお、ガ格句の事物の存在量はゼロであってもよい）。

たとえば、「乏しい」を述語とする(21)は、「日本に備わっているべき資源の量」からみて不十分な量で「資源」が存在することを表している。また、「欠ける」を述語とする(23)は、「政治家としての本当の指導力」を「ミュラー」に備わっているべきものとみなした上で、それが「ミュラー」において非存在であること（存在量がゼロであること）を表している。

「乏しい」や「欠ける」がこうした内容の「存在・非存在」を表すことは、これらの述語がガ格句にとる名詞の傾向からも窺える。これらの述語がガ格句にとるのは、性質（e.g., 柔軟性が乏しい）、能力（e.g., 観察力が欠けている）、態度（e.g., 誠実さが欠けている）、感情（e.g, 情愛が乏しい）、外形的特徴（e.g., 起伏が乏しい）、成分（e.g., 水分が乏しい）、知識（専門知識が乏しい）、資源（天然資源が乏しい）等、何かに備わって存在する事物を指す名詞であり、その中でも、「柔軟性」「誠実さ」「知識」といった、一般に多く備わっていることが望ましいとみなされる事物を指す名詞であることが多い。次の(26)のように、通常望ましいものとはみなされない性質を指す名詞（ずる賢さ）をガ格句にとることも可能であるが、その場合も、「ずる賢さも必要である（のに、それがない）」という評価的な意味が強制的に読み込まれることになる。

(26) 彼にずる賢さが欠けているコト

［彼にはずる賢さが欠けている］

このように、交替述語の「乏しい」と「欠ける」が～ニ～ガ形において表す「存在・非存在」とは、「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量でガ格句の事物がニ格句の事物に存在す

る」という内容のものであると考えられる。

これに対し、同じ「存在・非存在」を表す述語でも、～ニ～ガ形しかとらない非交替述語が表す「存在・非存在」には、このような意味的特徴が見られない。以下に、交替を起こさない述語の例を挙げる。

(27)彼に指導力がある(ない)コト
［彼には指導力がある(ない)］
(交替形：*彼が指導力にある(ない)コト
［*彼は指導力にある(ない)］)
(28)日本に資源が多い(少ない)コト
［日本には資源が多い(少ない)］
(交替形：*日本が資源に多い(少ない)コト
［*日本は資源に多い(少ない)］)

「ある」「ない」「多い」「少ない」も、ニ格句の事物におけるガ格句の事物の存在・非存在を表すが、これらの述語の表す意味の中に、ガ格句の事物を望ましい事物としてみなすという、評価的な意味は含まれていないと考えられる。このことは、先の(26)と次の(29)を比較してみると、よく分かる。

(29)彼にずる賢さがないコト
［彼にはずる賢さがない］

前述のように、「欠ける」を述語とする(26)では、「ずる賢さも必要である（のに、それがない）」という発話者の評価が強制的に読み込まれる。これに対し「ない」を用いた(29)が表すのは、単に「ずる賢さが彼において存在しない」ということのみであり、「ずる賢さも必要である」といった評価は含意されない。このように、「乏しい」「欠ける」とは異なり、「ある」「ない」「多い」「少ない」等が表す「存在・非存在」には、十分か不十分かといった評価的な意味が含まれないといえる（仮に、(27)～(29)の文から何らかの評価が読み取れるとしても、それは、「指導力」「資源」「ずる賢さ」という名詞が表す事物に対する評価からもたらされるものであり、「ある」「ない」「多い」「少ない」という述語によって表される意味ではない）[注6]。

次に、交替述語の「乏しい」「欠ける」が表す「存在・非存在」の特徴をさらに明確にするために、やや特殊なふるまいをする「不足する」「足りる（足りない）」という述語について考えてみたい。次の(30)が示すように、これらの述語は、～ニ～ガ形には現れる。

(30)彼に指導力が不足している(足りない)コト
［彼には指導力が不足している(足りない)］

一方、その交替形である～ガ～ニ形はどうだろうか。筆者の内省では、かなり不自然に感じられる。

(31)??彼が指導力に不足している(足りない)コト
［??彼は指導力に不足している(足りない)］

「不足する」については、安(1997)が同様に、「??彼は持続力に不足している（安1997:22(25b)）」という例文を挙げて、許容度が低いという見解を示している（なお、安1997は、「足りる（足りない）」については言及していない）。また、本稿の～ガ～ニ形にあたる文型（e.g., 彼は指導力に乏しい）を取り上げている研究に、まつもと(1979)や林(1999)等があるが、これらの研究でも、～ガ～ニ形をとる述語として「不足する」「足りる（足りない）」は挙げられていない。つまり、これらの述語は、これまで、～ガ～ニ形をとる述語としては言及されてこなかったものである。

ただし、(31)は、完全に不適格とはいえないようにも感じられる。先に取り上げた「ある」「ない」「多い」「少ない」の～ガ～ニ形（e.g., *彼が

指導力にあるコト、*日本が資源に少ないコト）の不自然さに比べると、(31)は、若干、許容度が上がるように思われる（安 1997 でも、「彼は持続力に不足している」という例文の許容度を「??」としており、「*」とはしていない）。

実際、「不足する」「足りる（足りない）」の～ガ～ニ形での使用は全くないわけではなく、次のような使用例も見られる。

(32) どこからみても流麗で均整がとれているが、聴き手の精神を高揚させ、あるいは圧倒するような根源的な力強さに不足する。

（『シューベルトからリストまで』）

(33) まず申し上げたいのは、私が津本先生の作品をとやかく言えるほどの知識、感性、そして人生経験に足りた人間ではないということです。

（酒井若菜「不完全なヒーロー」津本陽著『龍馬の油断』レビュー『文藝春秋 BOOKS』2013 年 10 月 22 日掲載 http://books.bunshun.jp/articles/-/2276）

つまり、「ある」「ない」「多い」「少ない」等の典型的な非交替述語とは異なり、「不足する」「足りる（足りない）」は、（基本的には非交替述語であると考えられるものの）～ガ～ニ形での使用も完全に不適格とはいえないという状況にあり、文法性判断が微妙なのである。では、この微妙さ（これらの述語の特殊性）は、どのように捉えられるのだろうか。

ここで、これらの述語が表す「存在・非存在」と、交替述語である「乏しい」「欠ける」が表す「存在・非存在」に、どのような異同があるのかを考えてみたい。「不足する」「足りる（足りない）」は、ガ格句の事物を、あるべきものとみなした上で、それが十分には存在しないことを表す述語だと考えられる。これは、たとえば、「彼にはずる賢さが足りない」といった場合、通常は望ましいものとはみなされない「ずる賢さ」のような事物がガ格句にきていても、「ずる賢さも必要である（のに、それが十分には存在しない）」という解釈が強制的に読み込まれることから確認できる。このように、これらの述語は、十分・不十分という評価的な意味を持っており、その点で、一見、「乏しい」や「欠ける」と同じ種類の「存在」を表すようにもみえる。

しかし、「乏しい」「欠ける」と「不足する」「足りる（足りない）」との間には、次のような異なりがある。

(34) パンフレットが｛足りず／不足し／??乏しく／*欠けていて｝、来場者全員に渡すことはできなかった。

上記(34)では、「乏しい」と「欠ける」の使用が不自然である。これは、「乏しい」「欠ける」と「不足する」「足りる（足りない）」に、次のような相違点があるためだと考えられる。既に述べたように、「乏しい」「欠ける」は、ガ格句の事物（e.g., 天然資源）を「ニ格句の事物（e.g., 日本）に備わっているべきもの」と見なし、「ニ格句の事物に備わっているべき量」を基準としてガ格句の事物の存在量が十分か不十分かを述べるものである（例文としては「日本には天然資源が乏しい」等）。ここでポイントになるのは、「ニ格句の事物（e.g., 日本）に備わっているべきもの」というところであり、「乏しい」「欠ける」では、「ガ格句の事物」を「ニ格句の事物」から切り離して捉えることができないという点である。よって、(34)のような、「y に備わっているべき x（パンフレット）」の「y」に当たるものが想定しにくい文では、「乏しい」や「欠ける」の使用が不自然になるのだと考えられる。これに対し、「不足する」「足りる（足りない）」には、そのような制約はない。これらの述語は、ガ格句の事物を単

に「あるべきもの」とみなすだけであり、それが何かに備わって存在するものかどうかは問題にしない。したがって、(34)のような文でも使用できるのだと考えられる。

以上のように、「不足する」「足りる（足りない）」の語彙的意味には、「ガ格句の事物を、何かに備わっているべき事物としてみなして述べる」という特徴がない。つまり、これらの述語は、十分・不十分という評価的な意味を表すものの、それは、「乏しい」「欠ける」の場合のような、「ニ格句の事物に備わっているべき量」を基準としてなされる評価ではないのである。この相違点が、交替述語の「乏しい」「欠ける」と、交替を起こしにくい「不足する」「足りる（足りない）」とを隔てているのだと考えられる。

ただし、上でも述べたように、「不足する」「足りる（足りない）」は、十分か不十分かという評価的な意味を持つ点では、「乏しい」「欠ける」と共通している。そのため、ガ格句に「性質」「知識」「資源」といった、何かに備わって存在する事物を指す名詞がきた場合には、「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量でガ格句の事物が存在する」という、「乏しい」や「欠ける」が語彙的に表す意味に近い意味を文全体で実現することになる。「不足する」「足りる（足りない）」が、先の(32)(33)のように、～ガ～ニ形で使用される場合があるのは、このためだと考えられる。

以上の議論から、単にガ格句の事物の存在量を評価的に表すというだけでなく、「ニ格句の事物に備わっているべき量」を基準としてガ格句の事物の存在量を評価的に表すということが、交替述語「乏しい」「欠ける」の特徴として重要な点であることが分かる。また、本稿のような分析を行うことにより、「不足する」「足りる（足りない）」の文法性判断が微妙であることの理由も、説明できるようになる。

4.2.「乏しい」「欠ける」が表す「状態」のタイプ

前節では、非交替述語「ある」「ない」「多い」「少ない」や、交替を起こしにくい「不足する」「足りる（足りない）」との比較から、交替述語「乏しい」「欠ける」が表す「存在･非存在」の特徴を分析し、「乏しい」と「欠ける」が表す「存在･非存在」とは、「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量でガ格句の事物がニ格句の事物に存在する」という内容のものであることを述べた。

続いて、本節では、「乏しい」「欠ける」が表す「状態」が、どのような種類の「状態」であるのかを分析したい。以下に、これらの述語が～ガ～ニ形で用いられている例（すなわち、「状態」を表す述語として用いられている例）を挙げる。なお、参考として、括弧内に、交替形である～ニ～ガ形の例を示す。

(35) 特にパソコンやコンピュータウイルスに対しての知識に乏しいユーザーは自分のパソコンがウイルスに感染していることも知らないまま、毎日使ってしまう。
（『危ないネットの歩き方』）
(交替形：パソコンやコンピュータウイルスに対しての知識が乏しいユーザー)

(36) スケトウダラすり身を作るのに、大量のタンパク質をロスしたり、いわゆる「骨なし、皮なし、臭いなし」の栄養に乏しい加工食品が横行し、栄養豊富なところが肥料になったり捨てられたりしている。（『魚』）
(交替形：栄養が乏しい加工食品)

(37) このことははっきり言えるが、兄は商売を発展させていく才覚に欠けていたのだ。
（『父からの手紙』）
(交替形：兄には商売を発展させていく才覚が欠けていた)

(38)そういう人たちにカウンセリングしてお話を聞きますと、「自分は、集中力に欠けているのではないだろうか」という悩みにつき当たります。　　（『5分間集中力トレーニング』）
（交替形：自分には集中力が欠けている）

「(～ガ～ニ)乏しい」と「(～ガ～ニ)欠ける」には、次の(39)のような共通した特徴があると考えられる。

(39)「（～ガ～ニ)乏しい/欠ける」の特徴
ガ格句の事物について、その内的要素の保有度が十分な度合いではないことを表す。

具体的に説明したい。状態を表す述語は、たとえば「この石は丸い」であれば、「この石」の形状がどうであるかを表し、「お茶が熱い」であれば「お茶」の温度がどうであるかを表す、というように、ガ格句の事物（石、お茶）の何らかの側面（形状、温度、等）を取り上げて、それがどのような状態であるかを述べる述語である。～ガ～ニ形の「乏しい」と「欠ける」も、これらと同様に、ガ格句の事物の何らかの側面を取り上げて、その状態を叙述していると考えられるが、その側面とは、「内的要素（性質、能力、知識、成分等）の保有度」であると考えられる。たとえば(35)は、ガ格句「ユーザー」の「知識」の保有度について、また(37)は、ガ格句「兄」の「才覚」の保有度について、それが十分な度合いではないことを述べている。

「乏しい」や「欠ける」の叙述する側面が「内的要素の保有度」であることは、次の(40a)と(40b)を比べるとよく分かる。

(40)a. 彼は不誠実だ
b. 彼は誠実さに乏しい

(40a)も(40b)も、「彼」の性格・態度がどうであるかを述べた文であり、文全体としては、どちらも同じような内容を表している。しかし、それぞれの文の述語が表す意味に着目してみると、(40a)の述語「不誠実だ」が、性格・態度がどうであるかを叙述する語であるのに対し、(40b)の述語「乏しい」は性格・態度を叙述する語ではないという点に、大きな違いがある。「乏しい」が表すのは「保有度がどうであるか」であり、「誠実さという要素の保有度が十分な度合いではない」ということを表すことによって、結果的に、文全体で、(40a)と同じような内容を表すことになるのだと考えられる[注7]。

以上のように、「乏しい」と「欠ける」は、ガ格句の事物の「内的要素の保有度」の側面を取り上げて、それがどのような状態であるかを表す述語であると考えられるが、交替述語としての特徴も、まさにこの点にあると考えられる。このことを、非交替述語との比較により見ていきたい。1項述語である「丸い」「熱い」「不誠実だ」等が交替を起こさないこと（存在・非存在を表す～ニ～ガ形をとらないこと）は、いわば当然であるので、以下では、状態を表す述語の中でも、「乏しい」や「欠ける」と同じくガ格句とニ格句の2項をとるものを比較対象として分析する。

(41)彼が語学に優れているコト
［彼は語学に優れている］
（交替形：*彼に語学が優れているコト
［*彼には語学が優れている］）
(42)彼が大型船の操縦に長けているコト
［彼は大型船の操縦に長けている］
（交替形：*彼に大型船の操縦が長けているコト
［*彼には大型船の操縦が長けている］）
(43)彼が経理に疎いコト
［彼は経理に疎い］
（交替形：*彼に経理が疎いコト
［*彼には経理が疎い］）

上記(41)～(43)が示すように、「優れる」「長ける」「疎い」は、～ガ～ニという格体制をとるが、～ニ～ガ形は取らない（すなわち、格体制の交替を起こさない）。これは、これらの述語が、「乏しい」「欠ける」とは異なり、内的要素の保有度を叙述する述語ではないからだと考えられる。「優れる」「長ける」「疎い」が内的要素の保有度を表す述語でないことは、これらの述語のとるニ格句が表すのが、「優れる」等の状態の成立する「分野・領域」であり、「性質、能力、知識、成分等の、保有される要素」ではない、という点に表れている。たとえば(41)の「語学」は、「彼が優れている」という状態が成立する分野であり、「語学」を「彼」に保有される要素として（性質、能力、知識、成分等として）解釈することはできない。(42)の「大型船の操縦」や(43)の「経理」も同様である。

一方、交替述語の「乏しい」「欠ける」は、こうした、「領域・分野」としか解釈できない名詞をニ格句にとることはできない。

(44)*彼は語学に欠けている
　cf.彼は語学力に欠けている
(45)*彼は大型船の操縦に乏しい
　cf.彼は大型船の操縦技術に乏しい
(46)*彼は経理に乏しい
　cf.彼は経理の知識に乏しい

(44)～(46)が示すように、「乏しい」や「欠ける」は、「語学」「大型船の操縦」「経理」のような、分野・領域としか解釈できない名詞をニ格句にとることはできず、それぞれ、「語学力」「大型船の操縦技術」「経理の知識」のように、能力や知識等、ガ格句の事物が保有する要素として解釈できる名詞に変える必要がある。

以上の、交替述語「乏しい」「欠ける」と、非交替述語「優れる」「長ける」「疎い」との比較から、状態を表す述語の中でも、ガ格句の事物について、内的要素（性質、能力、知識、成分等）の保有度を叙述する述語が交替を起こすということが分かる。

4.3. 「乏しい」「欠ける」が格体制の交替を起こす仕組み

4.1 と 4.2 では、「乏しい」「欠ける」が表す「存在・非存在」と「状態」のタイプをそれぞれ記述した。これを踏まえ、本節では、これらの述語が、どのような仕組みで格体制の交替を起こすのかを考察する。

4.1 で記述したように、「（y ニ x ガ）乏しい/欠ける」は、「y に備わっているべき量からみて不十分な量で、x が y に存在する（x の存在量がゼロであってもよい）」という内容の「存在・非存在」を表す。これは、見方を変えれば、「内的要素 x の保有度に関して、y が不十分な状態にある」という、y の「状態」の事態としても解釈できる。また、4.2 で記述したように、「（y ガ x ニ）乏しい/欠ける」は、「y が、内的要素 x の保有度に関して不十分な状態にある」という内容の「状態」を表す。これは、見方を変えれば、「y に備わっているべき量からみて不十分な量で y に x が存在する」という、x の「存在・非存在」の事態としても解釈できる。「乏しい」と「欠ける」が格体制の交替を起こす背景には、こうした、「存在・非存在」の事態類型と「状態」の事態類型との間の読み替えがあるのだと考えられる。

それでは、なぜ「乏しい」「欠ける」の表す「存在・非存在」は「状態」に読み替え可能で、「ない」「足りない」等が表す「存在・非存在」は「状態」への読み替えができない（あるいは読み替えが難しい）のだろうか。また、なぜ「乏しい」「欠ける」の表す「状態」は「存在・非存在」に読み替え可能で、「優れる」「疎い」等の表す「状態」は「存在・非存在」に読み替えることができないのだ

ろうか。これらの点について、以下でさらに考えてみたい。

まず、「(y ニ x ガ)乏しい/欠ける」と「(y ニ x ガ)ない/足りない」の違いは、前者の表す「ガ格句の事物の存在のあり方」にはニ格句の事物が関わっているのに対し、後者の表す「ガ格句の事物の存在のあり方」はニ格句の事物とは無関係に規定されるという点である。既に述べたように、「乏しい」と「欠ける」は、単にガ格句の事物の存在量が少ないということを表すのではなく、「ニ格句の事物に備わっているべき量」からみて不十分な量でガ格句の事物が存在することを表す。つまり、「ガ格句の事物の存在のあり方（どのくらいの量で存在するのか）」が、ニ格句の事物の観点から規定されるという点で、「乏しい」「欠ける」が表す「ガ格句の事物(x)の存在のあり方」にはニ格句の事物(y)が組み込まれているのであり、このことが、「x の存在・非存在」という事態を、y に関する事態として（「y の状態」という事態として）読み替えることを可能にしているのだと考えられる。これに対し、「ない」「足りない」等が表す「ガ格句の事物の存在のあり方」には、ニ格句の事物が関わらない（4.1 で述べたように、「ない」は十分・不十分という評価的な意味をそもそも持っていない。また「足りない」は不十分という評価的な意味を持つが、その評価にニ格句の事物は関わらない）。そのため、これらの述語が表す「x の存在・非存在」という事態を、y に関する事態として読み替えることはできない（より正確に言えば、「足りない」等の場合は、読み替えが難しい）のだと考えられる。

次に、「（y ガ x ニ）乏しい/欠ける」と「（y ガ x ニ）優れる/疎い」の違いについては、次のように考えられる。既にみたように、「乏しい」と「欠ける」は、ガ格句の事物(y)について、その内的要素(x)の保有度がどうであるかを述べる述語であるが、この「保有度」とは、ガ格句の事物(y)のみに関する状態ではなく、ガ格句の事物(y)とニ格句の事物(x)とで構成される総体的な状態である。つまり、これらの述語の表す「ガ格句の事物(y)の状態」には、ニ格句の事物(x)が、状態の構成物として組み込まれているのであり、このことが、これらの述語の表す「y の状態」という事態を、x に関する事態として（「x の存在・非存在」という事態として）読み替えることを可能にしているのだと考えられる。これに対し、「優れる」「疎い」等が表すのは、ガ格句の事物(y)それ自体に関する状態であり、ガ格句の事物(y)とニ格句の事物(x)によって構成される状態ではない（たとえば「彼は語学に優れている」における「語学」は、「優れている」という状態を構成する事物ではなく、「優れている」という状態が成立する分野である）。そのため、これらの述語が表す「y の状態」という事態を、x に関する事態として読み替えることはできないのだと考えられる。

以上のように、「(y ニ x ガ)乏しい/欠ける」が表す「x の存在のあり方」には、ニ格句の事物 y が組み込まれており、また、「(y ガ x ニ)乏しい/欠ける」が表す「y の状態」には、ニ格句の事物 x が組み込まれている。このことが、x に関する事態を y に関する事態に読み替えること（あるいは、y に関する事態を x に関する事態に読み替えること）を可能にし、～ニ～ガ形と～ガ～ニ形の交替が起こるのだと考えられる[注8]。

5．交替述語「満ちる」「あふれる」の分析

本節では、残りの交替述語である「満ちる」「あふれる」について分析を行う。

既に述べたように、「満ちる」「あふれる」も、「乏しい」「欠ける」と同じく、「満ち欠け代換」を起こす。

(47) a. 選手達に自信が満ちているコト
　　［選手達には自信が満ちている］

b. 選手たちが自信に満ちているコト
［選手達は自信に満ちている］

(48) a. 彼に才能があふれているコト
［彼には才能があふれている］
b. 彼が才能にあふれているコト
［彼は才能にあふれている］

ただし、「満ちる」「あふれる」には、「乏しい」「欠ける」とは異なる、次のような特徴がある。それは、状態変化を表す述語文の形式が、～ガ～ニではなく～ガ～デになる場合があるという点である。以下に例を示す。

(49) a. グラスに水が満ちている
b. グラスが水で満ちている

(50) a. 通りに車があふれている
b. 通りが車であふれている

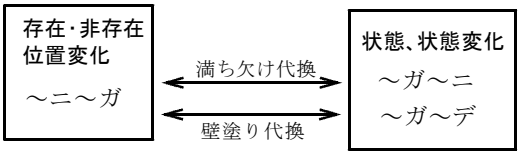
上記(49)(50)では、位置変化を表す文の形式は～ニ～ガであり、「満ち欠け代換」の場合と同じであるが、状態変化を表す文の形式が～ガ～デになっており、この点が「満ち欠け代換」とは異なっている。この(49)(50)のような、～ニ～ガ形と～ガ～デ形が交替する現象は、「壁塗り代換」と呼ばれている[注9]。なお、「乏しい」と「欠ける」が「壁塗り代換」を起こさないことは、次の(51)(52)から確認できる。

(51) a. 日本に天然資源が乏しいコト
［日本には天然資源が乏しい］
b.*日本が天然資源で乏しいコト
［*日本は天然資源で乏しい］
cf. 日本が天然資源に乏しいコト
［日本は天然資源に乏しい］

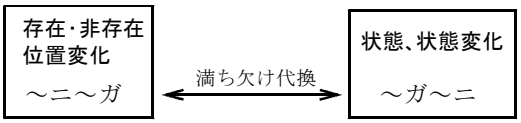
(52) a. 彼に積極性が欠けているコト
［彼には積極性が欠けている］
b.*彼が積極性で欠けているコト
［*彼は積極性で欠けている］
cf. 彼が積極性に欠けているコト
［彼は積極性に欠けている］

以上のことを整理して示すと、次のようになる。

(53)
a. 満ちる・あふれる



b. 乏しい・欠ける



つまり、「満ちる」「あふれる」と「乏しい」「欠ける」には、次のような共通点と相違点があるといえる。

(54)「満ちる」「あふれる」と「乏しい」「欠ける」の関係
a.共通点…「存在・非存在、位置変化」を表す文と、「状態、状態変化」を表す文との間の交替を起こす。
b.相違点…「満ちる」「あふれる」では、状態変化を表す文の形式が 2 パターンある（すなわち、「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」が成立する）。一方、「乏しい」「欠ける」では、状態を表す文の形式が 1 種類に固定されている（すなわち、「満ち欠け代換」しか成立しない）。

本節では、上記(54)のような共通点と相違点の背景について考察したい。まず、5.1 において、(54a)の点を取り上げ、「満ちる」「あふれる」が、どのような仕組みで、位置変化を表す文（～ニ～

ガ形）と状態変化を表す文（～ガ～ニ形もしくは～ガ～デ形）の交替を起こすのかを明らかにする。そして、その成立原理と、4 節でみた「乏しい」「欠ける」による交替の成立原理との間に共通性がみられることを示す。次に 5.2 において、(54b)の点を取り上げ、なぜ「満ちる」「あふれる」は「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の両方を起こし、「乏しい」「欠ける」は「満ち欠け代換」しか起こさないのかを考察する。

5.1.「満ちる」「あふれる」が交替を起こす仕組み：「乏しい」「欠ける」との共通性

まず、「満ちる」「あふれる」が～ニ～ガ形で表す位置変化に、どのような特徴があるかを分析したい。以下に、これらの述語が～ニ～ガ形で用いられている例を示す（なお、参考として、括弧内に、交替形である状態変化述語文を示す）。

(55) ところが、その岩に空隙があり、そこに水が満ちているときは、その水の圧力が強くなるほど、破壊しやすくなります。
（『地震は必ずくる』）
（交替形：そこが水で満ちている）

(56) その声には、凛とした厳しさが満ちている。
（『忘恋奇談』）
（交替形：その声は、凛とした厳しさに満ちている）

(57) しかし、千九百九十年代初頭にほとんどの共産主義政権が崩壊して市場経済化すると、世界中に工業製品があふれるようになった。
（『史上最大の株価急騰がやってくる！』）
（交替形：世界中が工業製品であふれるようになった）

(58) あの人のビジネスには創意があふれている。
（『白い眼』）
（交替形：あの人のビジネスは創意にあふれている）

「満ちる」と「あふれる」は、～ニ～ガ形において、ニ格句の事物の中にガ格句の事物が存在するようになることを表すが、その際、ニ格句の事物のスペース全体に行き渡る形でガ格句の事物が存在するようになることを表す。たとえば(55)の「そこ（岩の空隙）に水が満ちる」は、岩の空隙のスペース全てを占める形で水が存在するようになることを表す。また、(58)は、ニ格句「あの人のビジネス」を容器に見立て、その容器全体に「創意」が存在するということを述べることによって、創意豊かな様子を比喩的に表している（(56)についても同じことがいえる）。これは、次の「入る」や「ある」のような、非交替述語には見られない特徴である。

(59) 岩の空隙に水が入っている
（交替形：*岩の空隙が水で入っている／*岩の空隙が水に入っている）

(60) あの人のビジネスには創意がある
（交替形：*あの人のビジネスは創意にある／*あの人のビジネスは創意である）

「満ちる」「あふれる」と異なり、「入る」や「ある」が表す位置変化や存在には、「ガ格句の事物が、ニ格句の事物のスペースのどの程度を占めて存在するか」という情報は含まれていない。

以上のように、「満ちる」と「あふれる」は、「ガ格句の事物が、ニ格句の事物のスペース全体に存在するようになる」という内容の位置変化を表すが、ここには、「乏しい」と「欠ける」が表す「存在・非存在」と共通する特徴がある。4.1 でみたように、「乏しい」「欠ける」が～ニ～ガ形で表す「存在・非存在」とは、「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量で、ガ格句の事物がそこに存在する」という内容の「存在・非存在」であり、ガ格句の事物の存在の在り方が、ニ格句の事物の観点から（「ニ格句の事物に備わ

っているべき量」を基準として）規定されるという点に、特徴があった。これと同様に、「満ちる」「あふれる」が～ニ～ガ形において表すガ格句の存在の在り方も、ニ格句の事物の観点から（「ニ格句の事物のスペース」を基準として）規定されており、ここに、「満ちる」「あふれる」と「乏しい」「欠ける」の、交替述語としての共通性をみて取ることができる。

続いて、「満ちる」「あふれる」が～ガ～ニ形や～ガ～デ形で表す「状態変化」の特徴を分析する。以下に例文を示す（参考として、括弧内に、交替形である～ニ～ガ形の例を示す）。

(61) 彼の表情も自信に満ちて得意気だ。
（『スター・ストラック』）
（交替形：彼の表情にも自信が満ちて）

(62) かれらが互いに仲間を誘いながらやってくるため、たちまち店は客で満ちた。
（『司馬遼太郎の贈りもの』）
（交替形：店に客が満ちた）

(63) 男のいいわけは一見、理路整然として説得力にあふれているように見えるが、実はそこに墜し穴がある。（『うたかた』）
（交替形：男のいいわけには説得力があふれている）

(64) スタジアムの周辺はすでに人であふれていたが、祭りを前にした華やぎはあまり感じられない。（『杯』）
（交替形：スタジアムの周辺にはすでに人があふれていた）

「満ちる」と「あふれる」が表す状態変化とは、ガ格句の事物の埋まり具合の変化であると考えられる。たとえば、(62)は、ガ格句「店」の埋まり具合が 100%になるという変化を表している。また、(63)は、ガ格句「男のいいわけ」を容器に見立て、その容器の、「説得力」による埋まり具合が 100%であるということを述べることで、非常に説得的であることを比喩的に表していると考えられる（(61)についても同じことがいえる）。

このように、「満ちる」と「あふれる」は、～ガ～ニ形や～ガ～デ形において、ガ格句の事物の埋まり具合の変化を表すが、ここにも、「乏しい」と「欠ける」が～ガ～ニ形において表す「状態」の内容との共通性がみられる。4.2 でみたように、「欠ける」と「乏しい」は、ガ格句の事物について、その内的要素の保有度を表す述語であり、「保有度」という、ガ格句の事物とニ格句の事物とで構成される状態を表す点に特徴があった。「満ちる」「あふれる」が表す「埋まり具合」も、ガ格句の事物とニ格句（あるいはデ格句）の事物とで構成される総体的な状態であり、この点で、「乏しい」「欠ける」が表す「状態」の特徴と共通する。これは、次の「優れる」「ふくらむ」のような非交替述語が、ガ格句の事物それ自体の状態や状態変化を表すのと対照的である。

(65) 彼が語学に優れているコト
［彼は語学に優れている］
（交替形：*彼に語学が優れているコト
［*彼には語学が優れている］）

(66) 風船が空気でふくらむ
（交替形：*風船に空気がふくらむ）

4.2 でも述べたように、(65)が表すのは「彼が優れている」という状態が「語学」という分野において成立するということであり、ニ格句「語学」は「優れている」という状態を構成する事物ではない。また、(66)の「ふくらむ」も、「風船」が大きくなるという、ガ格句の事物それ自体の属性（大きさ）の変化を表している。

以上のように、「満ちる」「あふれる」が～ニ～ガ形で表す位置変化は、ガ格句の事物の存在のあり方がニ格句の事物の観点から規定されるとい

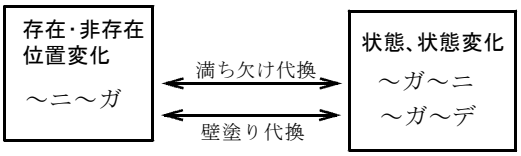
う点で、「乏しい」「欠ける」が表す「存在･非存在」と共通し、また、「満ちる」「あふれる」が～ガ～ニ形（あるいは～ガ～デ形）で表す状態変化は、ガ格句の事物とニ格句（あるいはデ格句）の事物で構成される総体的な状態の変化であるという点で「乏しい」「欠ける」が表す「状態」と共通する。このことを踏まえると、「満ちる」と「あふれる」が～ニ～ガ形と～ガ～ニ形（あるいは～ガ～デ形）の交替を起こす仕組みも、「乏しい」「欠ける」の場合と同様に、次のように捉えることができる。まず、「満ちる」「あふれる」は、～ニ～ガ形において、「ガ格句の事物 x が、ニ格句の事物 y のスペース全体に存在するようになる」という内容の位置変化を表すが、これは、見方を変えれば、「y の埋まり具合が 100 パーセントになる」という、y の状態変化の事態としても解釈できる。また、「満ちる」「あふれる」は、～ガ～ニ形（もしくは～ガ～デ形）において、「ガ格句の事物 y の埋まり具合が 100 パーセントになる」という内容の状態変化を表すが、これは、見方を変えれば、「y のスペース全体に x が存在するようになる」という、x の位置変化の事態としても解釈できる。「満ちる」「あふれる」が～ニ～ガ形と～ガ～ニ形（あるいは～ガ～デ形）の交替を起こす背景には、こうした、位置変化の事態類型と状態変化の事態類型の読み替えがあるのだと考えられる。

5.2.「満ちる」「あふれる」が二種類の代換を起こす仕組み：「乏しい」「欠ける」との違い

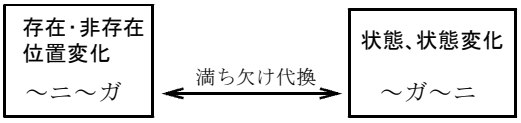
前述のように、「満ちる」「あふれる」と「乏しい」「欠ける」には、「存在･非存在、位置変化」を表す文と、「状態、状態変化」を表す文の交替を起こすという共通点がある一方で、前者は「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の両方を起こすのに対し、後者は「満ち欠け代換」しか起こさないという相違点がある。

(67)（＝(53)）

a. 満ちる・あふれる



b. 乏しい・欠ける



以下では、両者になぜこのような違いが生じるのかを考察する[注10]。

上記(67)が示すように、「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の違いは、状態や状態変化を表す文の形式が、前者では～ガ～ニになるのに対し、後者では～ガ～デになるという点にある。そこで、まず、この～ガ～ニ形と～ガ～デ形にどのような意味の違いがあるのかをみてみたい。以下に例文を示す。

(68)～ガ～ニ形

a. この素材が耐水性に乏しいコト
［この素材は耐水性に乏しい］

b. 彼が積極性に欠けているコト
［彼は積極性に欠けている］

c. 選手達が自信に満ちているコト
［選手達は自信に満ちている］

d. 彼が才能にあふれているコト
［彼は才能にあふれている］

(69)～ガ～デ形

a. グラスが水で満ちている

b. 通りが車であふれている

5.1 で述べたように、「満ち欠け代換」の～ガ～ニ形と「壁塗り代換」の～ガ～デ形は、ともに、

ガ格句の事物とニ格句（あるいはデ格句）の事物とで構成される総体的な状態を表すという点で共通する。しかし、細かくみてみると、～ガ～ニ形のニ格句と、～ガ～デ形のデ格句に、次のような違いがあることに気づく。4 節でみたように、「満ち欠け代換」の～ガ～ニ形のニ格句になるのは、性質や能力、知識、成分、資源等の、何かに備わっている事物であり、ガ格句の事物に内在する事物である。たとえば(68a)のニ格句「耐水性」は、ガ格句「この素材」に内在する性質であり、「この素材」の外に独立して存在し得るものではない。(68b)～(68c)の「積極性」「自信」「才能」についても同様である。これに対し、「壁塗り代換」の～ガ～デ形のデ格句になるのは、ガ格句の事物の内在物ではない。たとえば(69a)のデ格句「水」は、ガ格句「グラス」の外から来て「満ちる」という状態を構成する。(69b)のガ格句「通り」とデ格句「車」の関係についても同じことがいえる。なお、「壁塗り代換」を起こす述語には、「満ちる」「あふれる」の他に、「いっぱいだ」「満杯だ」等があるが、これらの述語がとる～ガ～デ形のデ格句も、ガ格句の事物の内在物ではなく、ガ格句の事物の外に独立して存在し得る事物である。

(70) 玄関が靴でいっぱいだ
　　(交替形：玄関に靴がいっぱいだ)
(71) タンクが水で満杯だ
　　(交替形：タンクに水が満杯だ)

このように、「満ち欠け代換」の～ガ～ニ形と「壁塗り代換」の～ガ～デ形は、総体的な状態を表すという点において共通しつつ、その総体的な状態の構成物がガ格句の事物の内在物であるか否かという点で異なっているといえる。

以上のことを踏まえて、なぜ「乏しい」「欠ける」は「満ち欠け代換」しか起こさず、「満ちる」「あふれる」は「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の両方を起こすのかを考えてみたい。

4.1 では、「乏しい」「欠ける」が、～ニ～ガ形において、「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量でガ格句の事物が存在する」という内容の「存在･非存在」を表すことをみた。つまり、「乏しい」「欠ける」が表す「存在･非存在」においては、ガ格句の事物がニ格句の事物の内在物であること（ニ格句の事物に備わって存在するものであること）が語彙的に指定されているといえる。そのため、交替形である、状態を表す文の形式は、～ガ～デ形ではなく、～ガ～ニ形に限定されることになり、「満ち欠け代換」のみが成立するのだと考えられる。

これに対し、5.1 でみたように、「満ちる」「あふれる」が～ニ～ガ形で表す位置変化とは、「ガ格句の事物がニ格句の事物のスペース全体に存在するようになる」という内容のものであった。このような内容の位置変化には、次の二つのケースが考えられる。一つは、既存物の位置変化であり、「グラスに水が満ちる」のように、元々ニ格句の事物（グラス）の外に存在していたもの（水）がニ格句の事物に移動してきて、そこに存在するようになる、というケースである。この場合、ガ格句の事物（水）はニ格句の事物（グラス）の外から来るものであり、ガ格句の事物の内在物ではないため、交替形である、状態変化を表す文の形式は、～ガ～デ形になり（グラスが水で満ちる）、「壁塗り代換」が成立する（～ガ～ニ形の「グラスが水に満ちる」は不自然である）。もう一つのケースとは、「発生」であり、「選手達に自信が満ちる」のように、ニ格句の事物（選手達）からガ格句の事物（自信）が発生し、ニ格句の事物（選手達）に存在するようになる、というケースである。この場合、ガ格句の事物（自信）はニ格句の事物（選手達）の中から生じそこに留まるもの、すなわちニ格句の事物の内在物であるため、交替

形である、状態変化を表す文の形式は、～ガ～ニ形になり（選手達が自信に満ちる）、「満ち欠け代換」が成立することになる（～ガ～デ形の「選手達が自信で満ちる」は不自然である）[注11]。

ところで、先に、「壁塗り代換」を起こす述語として、「いっぱいだ」と「満杯だ」を挙げたが（(70)、(71)）、これらの述語は、～ニ～ガ形において、「ニ格句の事物（e.g., 玄関）のスペース全体にガ格句の事物（e.g., 靴）が存在する」という内容の「存在」を表すという点で、「満ちる」「あふれる」に似ている。しかし、それにもかかわらず、「いっぱいだ」「満杯だ」が成立させるのは「壁塗り代換」のみであり、「満ち欠け代換」は起こさない。

(72) a. 玄関に靴がいっぱいだ
　　b. 玄関が靴でいっぱいだ
　　c. *玄関が靴にいっぱいだ
(73) a. タンクに水が満杯だ
　　b. タンクが水で満杯だ
　　c. *タンクが水に満杯だ

(72) が示すように、「～ニ～ガいっぱいだ」（(72a)）は、「壁塗り代換」の形式である～ガ～デ形に交替することはできるが（(72b)）、「満ち欠け代換」の形式である～ガ～ニ形に交替することはできないのである（(72c)）。(73) の「満杯だ」も同様である。このように、「満ちる」「あふれる」と「いっぱいだ」「満杯だ」には、前者が「壁塗り代換」と「満ち欠け代換」を起こすのに対し、後者は「壁塗り代換」しか起こさないという違いがあるが、この理由は、「満ちる」「あふれる」が動態述語であるのに対し、「いっぱいだ」「満杯だ」は静態述語であるという点にあると考えられる。前述のように、「～ニ～ガ満ちる/あふれる」は、「発生」を表すことにより、～ガ～ニ形との交替を成立させ、「満ち欠け代換」を起こす。これに対し、「～ニ～ガいっぱいだ/満杯だ」は、静態述語であるため、発生（無から有への変化）という動的な事態を表すことができない。よって、「～ニ～ガいっぱいだ/満杯だ」が、「～ニ～ガ満ちる/あふれる」のように「発生」を表して～ガ～ニ形に交替する（すなわち「満ち欠け代換」を起こす）ことはないのだといえる。なお、「乏しい」と「欠ける」も静態述語であるが、～ニ～ガ形において、「ニ格句の事物に備わっているべき量からみて不十分な量でガ格句の事物が存在する」という内容の「存在・非存在」を表すこれらの述語においては、発生を表すか否かということとは関係なく、ガ格句の事物がニ格句の事物の内在物であることが語彙的に指定されている。そのため、「～ニ～ガ欠ける/乏しい」は～ガ～ニ形に交替し、「満ち欠け代換」を起こすのである。

6．おわりに

本稿では、「満ち欠け代換」の成立原理について、以下のことを論じた。

①「満ち欠け代換」の起こる仕組み

「乏しい」「欠ける」「満ちる」「あふれる」が～ニ～ガ形（e.g., 日本に資源が乏しいコト）で表す存在・非存在や位置変化には、ガ格句の事物の存在のあり方がニ格句の事物の観点から規定されるという特徴がある（これに対し、「ある」「入る」等の、非交替述語が表す存在・非存在や位置変化には、このような特徴がない）。つまり、「乏しい」「欠ける」「満ちる」「あふれる」が表す「ガ格句の事物(x)の存在のあり方」には、ニ格句の事物(y)が組み込まれている。これにより、これらの述語の表す「xの存在・非存在（あるいは位置変化）」という事態を、yに関する事態として（yの状態や状態変化として）読み替えることが可能になる。

また、「乏しい」「欠ける」「満ちる」「あふれる」が～ガ～ニ形（e.g., 日本が資源に乏し

いコト）で表す状態や状態変化には、ガ格句の事物とニ格句の事物とで構成される総体的な状態であるという特徴がある（これに対し、「優れている」「ふくらむ」等の、非交替述語が表す状態や状態変化には、このような特徴がない）。つまり、「乏しい」「欠ける」「満ちる」「あふれる」が表す「ガ格句の事物(y)の状態」には、ニ格句の事物(x)が組み込まれている。これにより、これらの述語の表す「yの状態（あるいは状態変化）」という事態を、xに関する事態として（xの存在・非存在や位置変化として）読み替えることが可能になる。

「満ち欠け代換」は、こうした、事態類型の読み替え（「存在・非存在」と「状態」の読み替えや、「位置変化」と「状態変化」の読み替え）によって起こると考えられる。

②「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の関係

「壁塗り代換（e.g., グラスに水が満ちる／グラスが水で満ちる）」も、「存在・非存在、位置変化」と「状態、状態変化」の事態類型の読み替えによって成立する現象であり、この点で、「満ち欠け代換」と共通する。ただし、「満ち欠け代換」の～ガ～ニ形（e.g., 選手達が自信に満ちているコト）のニ格句が、ガ格句の事物の内在物であるのに対し、「壁塗り代換」の～ガ～デ形（e.g., グラスが水で満ちる）のデ格句は、ガ格句の事物に内在する物ではないという違いがある。

「満ちる」と「あふれる」は、「満ち欠け代換」と「壁塗り代換」の両方を成立させるが、これは、これらの述語が～ニ～ガ形で表す「位置変化」に、ガ格句の事物がニ格句の事物の内在物である場合（「選手達に自信が満ちる」のように、ニ格句の事物からガ格句の事物が発生する場合）と、内在物でない場合（「グラスに水が満ちる」のように、他の場所から既存物が移動してくる場合）の2通りが考えられるためである。これに対し、「乏しい」と「欠ける」が～ニ～ガ形（e.g., 日本に資源が乏しいコト）で表す「存在・非存在」では、ガ格句の事物がニ格句の事物の内在物であることが語彙的に指定されているため、「満ち欠け代換」しか起こらない。

注

注1　(1)～(4)をはじめ、本稿で取り上げる～ニ～ガ形や～ガ～ニ形の文は、「彼には積極性が欠けている」「彼は積極性に欠けている」のように、主節では、ハによって主題化した方が自然である場合が多い。本稿では、格体制を明示的にするために、連体節の形（コトを付けた形）で例文を示し、主題化した主節の例を[ ]内に併記して示すこととする。なお、5節で取り上げる「壁塗り代換」の用例のように、主題化の必要のないものについては、この限りではない。

注2　「満ち欠け代換」を起こす述語を網羅的に取り上げているわけではないが、定延(1993)や安(1996)でも、一部の述語について、川野(2002)および本稿と同趣旨の見解が示されている。

注3　本稿では、「乏しい」「欠ける」「ある」「ない」のように、静的な事態を表し、基本形とテイル形のアスペクト対立をもたない動詞や、形容詞等を、「静態述語」と呼ぶ（「欠ける」は、「欠けている」のようにテイル形でも用いられるが、「彼が積極性に欠けるコト[彼は積極性に欠ける]」のように基本形でも現在の事態を表し得ることから、静態述語に入る）。これに対し、「満ちる」「あふれる」「付く」「落ちる」のように、動的な事態を表し、基本形とテイル形のアスペクト対立を持つ述語を「動態述語」と呼ぶ。本稿における「静態述語」と「動態述語」の動詞は、それぞれ、工藤(1995)の「静態動詞」と「外的運動動詞」、日本語記述文法研究会編(2007)の「状態動詞」と「動き動詞」にほぼ相当する。

注4　本稿では、静的な事態のうち、「存在・非存在」以外

の事態を、「状態」と呼ぶ。

注5　本稿で提示する例文のうち、出典が示されているものは、(33)を除き、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から採取した用例である（(33)はwebサイト上の用例である）。なお、例文中の下線は本稿の筆者による。出典の示されていない例文は作例である。

注6　西尾(1972)や森田(1989)も、「乏しい」が、望ましいか望ましくないかという評価的な意味を持つという点で、「少ない」と異なると述べている。また、まつもと(1979)は、～ガ～ニ形の「乏しい」について、ニ格に「勇気」「気力」等の、量的に多いことが望ましい特徴を示す名詞がくると述べている（ただし、西尾1972、森田1989、まつもと1979は、こうした「乏しい」の意味的特徴を、交替現象と関連づけて述べているわけではない）。

注7　本稿における～ガ～ニ形にあたる文（e.g., 彼が誠実さに乏しいコト[彼は誠実さに乏しい]）について、まつもと(1979)は次のように述べている。

> かざられが、ひとやものごとの側面、要素にかんして、量的な観点からとらえる形容詞で、かざりに、それらの側面や要素をしめす名詞がくると、内容規定のむすびつきができる。内容規定のむすびつきは、ひとやものごとの内容的な側面を、量的に具体化している。
>
> （まつもと1979:292）

上記の記述が、本稿の見解（「乏しい」「欠ける」が～ガ～ニ形において表す状態が、内的要素の保有度であるという見解）と完全に一致するかどうかは分からないが、少なくとも「ひとやものごとの内容的な側面」や「量」に着目しているという点において、本稿との共通性がみられると思われる。

注8　「豊富だ」と「富む」は、「乏しい」と意味的に対をなすと思われるが、「乏しい」と異なり、「満ち欠け代換」を起こさない。たとえば、「豊富だ」は、「大豆にタンパク質が豊富なコト」のように、～ニ～ガ形には現れるが、～ガ～ニ形での使用は、本稿の筆者の内省では不自然に感じられる（??大豆がタンパク質に豊富なコト）。逆に、「富む」は、「大豆がタンパク質に富むコト」のように、～ガ～ニ形には現れるが、～ニ～ガ形での使用は不自然だと思われる（??大豆にタンパク質が富むコト）。この理由については、今後の課題としたい

注9　壁塗り代換は他動詞文でも起こる。他動詞文の場合は、「グラスに水を満たす」「グラスを水で満たす」、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」等のように、～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替になる。他動詞文も含めた壁塗り代換の詳細については、奥津(1981)、川野(1997)(2006)(2009)、岸本(2001)等を参照のこと。

注10　本節(5.2)の内容は、川野(2002)の内容と一部重複することを断っておきたい。川野(2002)は、～ガ～ニ形と～ガ～デ形の違いについて考察したものであり、満ち欠け代換や壁塗り代換の成立原理について考察したものではない。本稿では、川野(2002)の議論と、本稿で示した代換の成立原理の考察とが、どのように整合的につながるのかを明示的に示したいと考え、体系的な記述を目指す立場から、川野(2002)の内容の一部を5.2節に組み入れることとした。

注11　安(1996)は、～ニ～ガ形の「あふれる」を、「発生タイプ」と「移動変化タイプ」に分けている。ただし、安(1996)のこの区分と、本稿における「発生」と「既存物の位置変化」の区分とは、内実が異なる。たとえば、安(1996)の規定では、「表情に喜びがあふれる（安1996:13(1a)）」も「道に群衆があふれる（安1996:16(12a)」も、ともに「発生タイプ」に分類される。これに対し、本稿の区分では、「表情に喜びがあふれる」は「発生」、「道に群衆があふれる」は「既存物の位置変化」になる。また、安(1996)の「発生タイプ」と「移動変化タイプ」の区分は、代換の種類と連動しない（「表情に喜びがあふれる」は、「表情が喜びにあふれる」のように、「満ち欠け代換」を起こし、一方、「道に群衆があふれる」は、「道が群衆であふれる」のように、「壁塗り代換」を起こすが、上述のように、安1996では、これらはいずれも「発生タイプ」に入る）。これに対し、本稿では、本文中に述べたように、「～ニ～ガあふれる/満ちる」が「発生」

を表す場合は「満ち欠け代換」が成立し、「既存物の位置変化」を表す場合は「壁塗り代換」が成立すると考える。

引用文献

安平鎬(1996)「自動詞文における格の代換について―「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に―」『日本語と日本文学』23、筑波大学国語国文学会

安平鎬(1997)「contents のニ格構文をめぐって」『筑波日本語研究』2、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文―いわゆる spray paint hypallage について―」『国語学』127、国語学会

川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点―いわゆる「壁塗り代換」を中心に―」『筑波日本語研究』2、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

川野靖子(2002)「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係―「N1 ガ N2 デ～」と「N1 ガ N2 ニ～」の違いを中心に―」『日本語文法』2-1、日本語文法学会

川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象―格成分の対応の仕方―」『日本語の研究』2-1、日本語学会

川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞―交替の可否を決定する意味階層の存在―」『日本語の研究』5-4、日本語学会

岸本秀樹(2001)「壁塗り構文」影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

定延利之(1993)「深層格が反映すべき意味の確定にむけて―対称関係・対称性を利用して―」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版

西尾寅弥(1972)『形容詞の意味用法の記述的研究』秀英出版

日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法 3』くろしお出版

林謙太郎(1999)「「レモンはビタミン C に富む」という表現をめぐって」『近代語研究』10、武蔵野書院

まつもとひろたけ(1979)「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ―連語の記述とその周辺―」言語学研究会(編)『言語の研究』むぎ書房

宮島達夫(1972)『動詞の意味用法の記述的研究』秀英出版

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

用例出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

付記 本稿は、科学研究費補助金（基盤 C, 課題番号 26370527）による研究成果の一部である。